



史料紹介

ぶり 大平街道から鰯がやってくる



羽田真也（歴史研究所研究員）

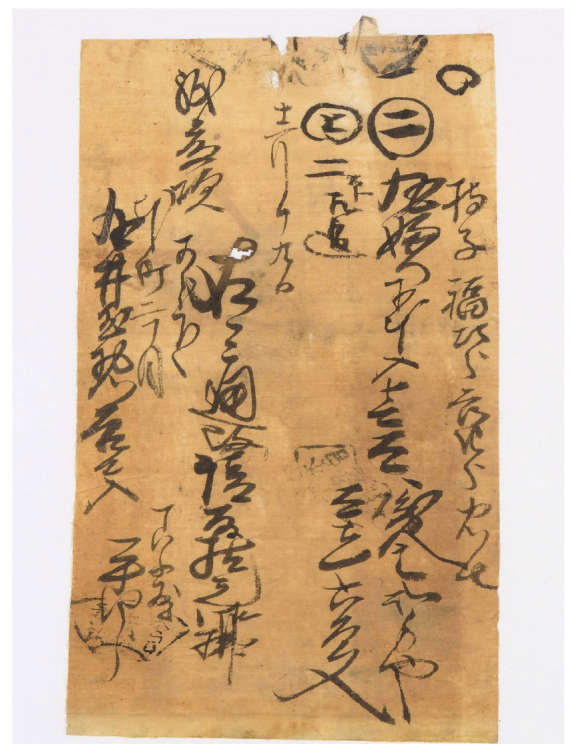
伊那谷の飯田と木曽谷の妻籠を結ぶ大平街道の中間にあった大平で宿屋を営んだ紙屋（大蔵家）は、街道を通る荷物の荷継ぎ（中継）も行っていました。そのためこの家の史料群（大平紙屋文書）には、紙屋が荷物とともに荷主から受け取った荷物の送り状が、江戸時代末を中心に数多く残されています。

その中に妻籠の丁子屋半四郎からの送り状が 90 通余りあります（写真参照）。興味深いのは、そこに記された荷物のほぼすべてが鰯であり、日づけが 12 月中・下旬に集中している点です。また、送り先は飯田城下町の 13 町（橋南）に屋敷を構える商人たちでした。古島敏雄氏は、大正期の飯田町では「飛騨鰯」が年取魚（大晦日の夜に食する魚）であり、「越中や能登の海岸で獲れた鰯が、冬だけ薄塩にして、馬の背で飛騨路をへて飯田地方に運ばれた」のだらうと述べていますが（古島敏雄『子供たちの大正時代—田舎町の生活誌』平凡社、1982 年、92～93 頁）、丁子屋の鰯もこうした年取魚用のものだったのでしょうか。

丁子屋の送り状をもう少し詳しく見てみましょう。90 通余りのうち 74 通は同じ年（おそらく天保 5〔1834〕年）のものと考えられます。この 74 通からは、12 月 15～23 日の短期間に大量の鰯が送り出されたことがわかります。また、鰯は 5 本をひとつの箱に入れ、持子と呼ばれる人が背負う場合は 1 人で 1 箱を、駄馬を使う場合は馬 1 頭で 3 箱を運んだこともうかがえます。持子や駄馬の荷物は、大平で飯田側から来た人馬に付け替えられたようですが、それでも妻籠やその周辺の人びとにとっては一定の収入源になったのでしょうか、例えば馬蔵という人は、9 日間に 7 度も持子や馬子として働いたことが知られます。また、持子には女性の名前も見えます。

これらの鰯の送り先は 13 町の商人 20 人余りでした。もっとも多く受け取ったのは本町二丁目の丸井屋惣吉で、その量は 44 箱（220 本）に及びます。こうした商人たちを介して、飯田城下町や周辺地域へ鰯がもたらされ、大晦日のお膳に並ぶことになったと思われます。

丁子屋の鰯がどこで獲れたものなのかはよくわかりません。ただし、送り状には「越中伝四郎分」「越中佐四郎殿」といった記載が散見されます。古島氏の記述も踏まえるならば、越中国（現在の富山県）で獲れた鰯が塩漬けにされ、妻籠や大平を経由して飯田へ持ち込まれたと想定できるかもしれません。



丁子屋半四郎からの送り状

歴史研究所のゼミ紹介

建築史ゼミ

岩田 会津（歴史研究所研究員）

「身近な空間の歴史を深掘りする」ことをテーマに、参加者各自が好きな場所を設定して、その土地の歴史を調べる作業をおこなっています。重要なのは、「過去」を知るだけではなく、それがいかにして「今」につながっているかを理解することです。あなたのいつも目にする場所の建物や地形、風景はどのような経緯で形作られたものなのか…実に些細なことですが、この点は案外調べるのが難しく、かつ非常に奥深いテーマです。地図や写真・文字などの資料に加え、現地でのフィールド調査を通して、個々の空間の成り立ちを解明することを目指します。

参加にあたって事前に要求される知識やスキルは特にありません。住宅地図や本より得られる基本的な情報からはじめ、毎回のゼミでどのような点が面白いのか、また今後どのように調査を進めるべきか議論するなかで、今後の方向性を模索していきます。調べる内容は皆さんバラバラで、さらに身近な場所に関する発表ですから、思わぬところから話が広がり（脱線し）、議論が白熱することもしばしばです。

私自身、飯田・下伊那については不勉強ですから、毎回みなさんの発表を聞くなかで色々なことを学ばせていただいています。是非多くの方にご参加いただけますと幸いです。

満洲移民研究ゼミ

本島 和人（歴史研究所調査研究員）

今から 90 年余前から始まった「満洲移民」（開拓団・青少年義勇軍）には飯田下伊那から8千4百人余が参加しました。当時の人口 18 万8千人からするとおよそ 22 人に 1 人が参加したことになります。あの時代を生きた人びとはなんらかの形で満洲移民に関わりがあったといえます。敗戦により約4千人が犠牲となりました。「開拓」の“夢”を抱いて渡った人びとも現地からみれば日本の戦争の加害者でした。国・県、地域を挙げて行なわれ大きな悲劇を生んだ満洲移民送出は現在もなお引き続く近現代史と地域の大きな課題です。

ゼミではそれぞれのテーマによる報告をもとに議論を重ね、情報の交換を行っています。20 歳代から高齢の方まで 15 人ほどが参加し、時には県内外からの研究者・大学生がゲストとして参加・報告します。満洲に関わりを持つ方、体験者から聞き取りを続けている方、中国帰国者支援のボランティアを続けている方、演劇による表現をめざしている

方。自分が暮らす地区の実態・犠牲となった親族の生涯・満洲移民送出の思想的背景と構造についても調査しています。役場史料や体験者の証言・回想記、遺された手紙・日記、当時の新聞・雑誌なども重要な史料です。歴史研究所に収蔵されている史料・文献が役立ちます。

満洲移民に参加した一人ひとりの背景と内面、送り出した側の構造・責任者の意識についても踏み込み、中国・東アジアと日本との関係を考えていくことも課題です。



ゼミの様子

近現代史ゼミ

田中 雅孝（歴史研究所調査研究員）

本ゼミでは、『胡桃澤盛日記』を読みあわせています。胡桃澤盛は、明治 38 年に旧河野村（現豊丘村）に生まれ、大正デモクラシー時代には高揚する青年運動のリーダー層として活動します。昭和恐慌期には、村会議員となり、村落社会の恐慌対策に奔走し、さらに太平洋戦争期には河野村長として、満洲分村移民を決断しました。戦後、分村移民の悲報が伝わる頃となる昭和 21 年 7 月に、盛は自死しました。『胡桃澤盛日記』は大正 12 年から昭和 21 年までが刊行されましたが、本ゼミでは、今年は日中戦争前夜となる昭和 11 年まで、到達しました。「盛日記」のミクロな個人史の日常生活世界と、地域史、日本史、世界史と重層的に広がるマクロな歴史を重ねあわせ、そしてゼミ参加者の人生経験に依拠した多様な読みを交流し、対話することが、本ゼミの愉しみといつてよいでしょう。

また、ゼミでは、地域の人々と対話し、その固有の人生経験を聞き書きという方法で記録してきました。こうした「聞き書き」の歴史研究を「オーラル・ヒストリー」ともいいます。その成果を『聞き書き・飯田町の暮らし』として、第 8 集まで刊行しました。それは人々の私的な人生経験を受けとめていく「地域記憶遺産」といってもよいと思います。市井に暮らす個々の人々にとって、「歴史とは何であったのか」を今後とも問い続けていきたいものです。



リレーミニエッセイ 37

矛盾の狭間

竹ノ内雅人（イェール大学／歴史研究所調査研究員）

パレスチナ侵攻に抗議する大学生たちの動きは、私の所属するイェール大学でも活発であった。1枚目の写真は4



月下旬、クロス・キャンパスというキャンパスの広場で行われた泊まり込みの抗議活動である。キャンパス内や市街地で盛んに抗議活動が繰り広げられたが、5月初め、大学の部外者が許可なく参加しているという理由で、大学の警察（イェール大学は 90 人ほどの独自の警察機構を持っている。権限はニューヘイブン市警察と同じ）が介入し、逮捕者を出した。それから、大学当局と参加者との話し合いが持たれ、コロンビアやハーバードと比較すればまだ穏当なかたちで収束していった。

9 月下旬の休日、同じくクロス・キャンパスで撮ったものが2枚目である。これはハマスによって拉致されたアメリカ国籍のユダヤ人を直ちに解放するよう求める活動であった。これまでイスラエル擁護の活動は小規模ながらもみられたが、かつてパレスチナ侵攻への抗議があった同じ場所で、これだけ資金力をみせたアピールは初めてだった。ただ、参加者の数はまばらだった。今度の紛争はハマスが全面的に悪い、と主張する声も身近なところから聞こえる。アメリカが抱える深刻な矛盾——それは地球規模の複雑な問題でもある。大統領選もひかえ、陰鬱な雰囲気はなかなか晴れる気配がない。



飯田アカデミア 2024

第106講座 伊那谷にやってきた平田派国学者たち

【講師】 三ツ松 誠さん（佐賀大学地域学歴史文化研究センター准教授）

【日時】 2025年2月1日（土）10：30～16：15

【会場】 飯田市役所 C棟3階会議室

第1講 10：30～12：00 平田国学の登場から伝来まで

第2講 13：00～14：30 明治維新と伊那谷の平田派たち

第3講 14：45～16：15 実行教と平田国学の教え

【要旨】

市村威人の『伊那尊王思想史』（1929年）は、タイトルからもわかるような時代の刻印を受けた著作でありながら、実証的な内容によって、幕末維新期の国学の地域的広がりを考える上で、戦後も基本書であり続けてきました。とはいえ今世紀に入り、平田家資料や松下家文書などの史料群の調査・整理・公開が進んだことにも後押しされながら、市村の時点では分からなかった事実が明らかになってきています。平田国学の登場や維新期の平田派の地域的活動、あるいはその後の不二道・実行教の普及など、市村が先鞭をつけた地域国学史上の重要テーマについて、主に他所から伊那地域にやってきた国学者に焦点を据えて、あらためて取り上げます。

【申込方法】 電話・Fax・メールのいずれかで受講方法と電話番号をお知らせください。

オンライン受講の方は郵便番号と住所をお知らせください。

1つの講義だけでも参加できます。

【締切日】 オンライン：1月17日 会場：1月30日 資料代：500円（高校生以下無料）

定例研究会

※聴講をご希望の方はお電話ください

○ 明治20年代上郷地区の地籍図にもとづく 天竜川沿線の景観構造分析

報告者 岩田 会津（研究員）

開催日 12月14日（土）14：00～16：00

会場 歴史研究所 研修室

○ 近世大平街道における物流と交通（仮）

報告者 羽田 真也（研究員）

開催日 2月8日（土）14：00～16：00

会場 歴史研究所 研修室

『年報』第23号掲載の論文等募集

来年度刊行（2025年度秋予定）の『年報』第23号への投稿論文等を募集します。

【ジャンルと標準枚数（400字詰め換算）】

・論文：40～60枚 ・研究ノート：20～50枚 ・史料紹介：10～30枚 ・調査報告：20～40枚

【締切】 12月28日（必着）（3月末までに審査結果をお知らせします）

【投稿先】 〒395-0803 飯田市鼎下山538 飯田市歴史研究所

※詳しくは『年報』第21号の投稿規定をご覧ください。

歴研ゼミ & ワークショップ 12月・1月の予定

会場：歴史研究所 研修室

近世史ゼミ

担当：羽田 真也（研究員）

12月11日・25日／1月8日・22日

（第2・第4水曜日）18：30～20：30

建築史ゼミ

担当：岩田 会津（研究員）

12月20日／1月17日

（第3金曜日）18：30～20：30

地域史ゼミ

担当：伊藤 悠（研究員）

12月12日／1月9日

（第2木曜日）13：30～15：30

思想史ワークショップ

市民の皆さんが自主的に学び合う場

12月4日・18日／1月15日

（第1・第3水曜日）19：00～21：00

満洲移民研究ゼミ

担当：本島 和人（調査研究員）

第155回 12月7日／第156回 1月4日

（第1土曜日）10：00～11：40

近現代史ゼミ

担当：田中 雅孝（調査研究員）

12月21日／1月25日

（第4土曜日）10：00～11：40

ゼミ・ワークショップの詳細・お申込みについては、歴史研究所までお問い合わせください。TEL：0265-53-4670

開所時間：午前9時～午後5時 休所日：日曜日・月曜日・祝日・12月29日～1月3日